



冷戦の終焉により 社会主義の実態が暴かれた

私は今年三月をもってひとまず三十四年にわたる大学での教員生活を終えますが、最後に一言だけ本誌上で申し上げておきたいことは、二十二、三年前の冷戦の崩壊によって、資本主義という経済体制に対する私の歴史認識が大きく変わったことです。

戦後の経済史学や歴史学は、程度の差はあるものの、あるいはその影響の受け方はさまざまですが、マルクス主義の影響を受けていました。冷戦の崩壊によって経済機能不全国家、人権抑圧国家としての社会主義の実態が暴かれるとともに、資本主義とは何かをあらためて考えさせられるようになりました。しかし残念な

冷戦の崩壊と 私の資本主義認識



ことに、日本のマルクス主義者の少なからぬ人びとは、その直前まで主張していた「社会主義生成期」論という世界史認識を急になぐり捨てて、あれは社会主義とは縁もゆかりもない独裁国家だったと断定しつつ、真の社会主義はいずれ必ず実現するとし、資本主義に対する歴史認識を深めるという学問的営みを放棄しました。真の社会主義は必ず実現すると主張していたそのときのマルクス主義者が、この三、四年急に「福祉国家」論（理念自体は支持しますが）を主張するようになったことを、私は奇異に感じています。福祉国家は、まぎれもなく資本主義国家の一つのタイプだからです。

抜け落ちた消費サイドの視点

資本主義という経済体制に対する私の認識が変わったのは、次のような考え方からです。『資本論』をはじめとするマルクスの文献によれば、資本主義のもとでは社会は資本家階級と賃金労働者階級の二つの階級に分裂し（中間的利害の消滅）、資本家は

賃金労働者の搾取を通して資本の蓄積を進め、その結果、賃金労働者は絶対的にも相対的にも窮乏化するとしています。しかしこの議論では、資本家が市場で販売する商品は、消費者である賃金労働者の窮乏化のために十分に売ることができず、資本の蓄積は進まないということになります。つまりマルクスの主張は、資本主義は革命的に変革される前に、「自死」という論理構成をとっているのです。マルクスの議論がなぜこうした矛盾した論理構成をとっているかといえば、その経済学が徹底した供給サイドの立場に立っており、需要サイド、消費サイドの視点が完全に抜け落ちているからです。

仮説：資本主義は、 職人層によって創造された

また、マルクス主義の立場に立った経済史学（歴史学）における資本主義の発生史論についても、私は疑問をもっています。従来の議論では、資本主義は封建制下の農民が生産力の発展とともに独立自営農民となり、その資本制的な両極分解によって、上昇した農民はブルジョアジーとなり、没落した農民はプロレタリアートとなるとされています。しかし、資本主義の

成立は機械制大工業の誕生を意味するわけですから、機械制大工業の担い手（紡績工や機械工）の出身階層は農民だったのか、もしそうであれば機械を操作するための熟練はいつものように身につけたのかという素朴な疑問がわき

ます。日本のばあい、機械工
 についていえば、農商務省が
 一九〇三年に発刊した『職
 工事情』のなかに旧職人層
 がその技能を通して機械工
 に転成したと、はっきり書
 いてあります。その他詳し
 いことは申し上げませんが、
 前近代社会において職人層
 が比較的分厚く存在したと
 ころで資本主義が生成した
 のではないかという仮説を
 私はもっています。

理論と距離をおくことで 見えてくる問題

このように具体的に考えると、資本主義の確立を
 どのような指標で捉えるかという従来の論争につい
 ても疑問を感じています。論争の一方の当事者は、
 農業と結びついていた自給的な家内工業（自給的衣
 料生産）が衣料生産の工場制工業化によって決定的
 に破壊され、商品経済が全社会的に押し広げられる
 ようになったこと、つまり機械制大工業としての綿
 工業の確立、これが資本主義確立の指標であるとし
 ています。論争のもう一方の当事者は、生産手段生
 産部門（機械工業など）と消費資料生産部門（綿工
 業など）の二つの部門が相互に関連し循環し再生産
 構造を描くようになること、これが資本主義確立の
 指標であると捉えています。こうした資本主義確立
 論争はマルクス主義の理論解釈と深く結びついてお



り、経済史研究としてはこれまで紡績業、製糸業、
 織物業、鉄鋼業、造船業、機械工業などの研究とし
 てすすめられてきました。

しかし、そうした理論と結びついた研究と一歩距
 離をおき、資本主義が確立するということを具体的
 に考えると、理論では見えなかったさまざまな問題
 が見えてくるようになります。つまり、資本主義の
 確立は具体的にいえば本格的な工業化社会の成立、
 機械制工場群の族生を意味します。そう考えると、
 当時の工場は木造ですからその木材はどのようにし
 て調達されたのか、工場を建設した職人はどのよう
 な人びとだったか、工場の操業には道路の整備や上
 下水道などのインフラ整備が必要ですから、それを
 担ったのはどのような人びとだったのかなど、さま
 ざまな問題が浮かんできます。煎じつめれば、林業
 や木材加工業、土木建築業の発展なしには資本主義
 は確立することができないということになります。
 しかし、こうした問題は理論的には想定する必要が

なく、そのため資本主義確立期の
 林業や土木建築業などについての
 研究はまったくなされてきません
 でした。

こうして考えると、理論的には
 ネグリジブルあるいはマージナル
 な問題であっても、具体的には重
 要で、ほとんど研究されていない
 問題群がたくさんあることがわか
 ります。このような具体的なもの
 の見方をすれば、資本主義が確立
 するためには、前近代社会におい
 て職人層が比較的分厚く存在し

ていること（それはその国の文明の在りようとかか
 わっていると思います）、都市の発展があったこと
 （土木建築業の技能的蓄積）、都市の比較的近い所に
 森林資源が豊富に存在することなど、地理的・文明
 史的諸条件をあげることができます。経済学の分野
 で理論に対する歴史、経済史学は、史実を重視する
 学問だとよくいわれますが、経済史学自身、ある種
 の理論的こだわりや思想的思い込みがあつて、本来
 見える重要な問題を見えなくしていることを、銘記
 したいものです。

経済学研究科教授 西成田 豊 (にしなりた・ゆたか)

1948年生まれ。一橋大学経済学部卒
 業、一橋大学大学院経済学研究科博
 士課程修了。経済学博士。龍谷大学
 経済学部助教授、一橋大学経済学部
 教授などを経て、現在、一橋大学
 大学院経済学研究科教授。主な研究
 テーマは、日本労働史・労使関係史、
 日本の経営論など。著書は、『経営と
 労働の明治維新—横須賀製鉄所・造船
 所を中心に—』（2004年、吉川弘文
 館）、『近代日本労働史—労働力編成
 の論理と実証』（2007年、有斐閣）、
 『退職金の一四〇年』（2009年、青木
 書店）など多数。